説教20210328 ルカによる福音書22:14-30

「私と一緒に踏みとどまろう」 237　21-292　　202

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

 過ぎ越しの食事というのは、先週の祈祷会でも触れましたが、種なしパンや、焼いた羊肉そして　ゆで卵などを特別に食べて、イスラエルの人々がエジプトから追放されて脱出したことを祝う食事のことです。過ぎ越しの食事をとる期間は、今日からイースター前日の4月3日までで、イスラエルの人々は、エジプトからの脱出を記念して、この特別な食べ物を毎年食べ続けているのです。それにしましても、なぜ脱出に際して、食事なのでしょうか。随分悠長なことだと思われないでしょうか。命が絶たれるかも知れない危機迫る状況にあって食事などにかまっていられるでしょうか。それも種なしパンや、羊肉やゆで卵といった、特別のメニューを用意する余裕があるでしょうか。

　この疑問は、出エジプト記１２章からの主の過ぎ越しの章をよく読めば解けてきます。実は、このイスラエルの人々のエジプトからの脱出が成就したのは、これらの食べ物を周到に準備したからこそなのです。先ず、子羊を屠って食べる理由は、その子羊の血を鴨居に塗ってしるしとし、自分たちが打たれないようにするためでした。そして種無しパンというのは、パンを膨らませる時間を短縮し、非常食として持ち出す食料として確保するためでした。そしてこのように整えられた食事をイスラエルの人々は共同体として、一人ももれることなく、分かち合いながら全員で食べたのでした。

　このような次第ですから、私たちはイスラエルの人々のエジプトからの脱出を、日本史でよくみられる脱走や逃げ出しと区別して考えないといけません。例えば日本史ですと、よく皇族や将軍が京都を脱出して、他の地に潜伏して再起を伺うという事や、農民が一つの村を放棄して浮浪の民となることが見られました。このような成り行きでは、とるものもとりあえず、命からがらという仕儀となってしまいます。またそれは決して救いの道ではないでしょう。一方、イスラエルの人々のエジプトからの脱出はそうではなくて、それはじっくりと神の御心に従って練られた脱出の計画の成就であり、神による救いの実現の一幕だったのです。

　ですから、私たちは、この時に、イースターを見据えて、じっくりと用意周到に、過ぎ越しの食事をこれから日々味わっていきたいと願います。

　さて、今日の聖書箇所は、最後の晩餐とも言われる箇所です。なぜ最後かと言いますと、我らの主イエス様が、この地上で最後に、私たち人間と、過ぎ越しの食事をともにされたときのことが記されているからです。過ぎ越しの食事は毎年食べられるのですが、それがイエス様と共に食べられたというのは、この時が最後となったのです。

　最後の食事、それはどんな時でも感慨深い時となることでしょう。私事で恐縮ですが、去年の3月に神学校の卒業生で最後の晩餐をしたときのことを思い出します。私たち神学生は、それぞれの任地に派遣されバラバラにされますが、そういう成り行きであるからこそ、その食事会の一瞬一瞬が貴重な時間になったように思います。その記憶は、供された食事や、交わされた言葉、場所の雰囲気などが混然一体となって残されています。ことに言葉というのは、なくてはならない要素です。私は、新しいエルサレムをイメージして「新しい別府（ニューべっぷ）でまたお会いしましょう」と言って別れの言葉としましたが、この言葉もみんなに記憶され、効果があったかもしれません。

　イエス様との最後の晩餐、しかしそれは最後ではなくて、イエス様の言われるとおり、神の国がきたときに、また私たちはイエス様と共に食事をすることが出来るのです。それまでの別れの時に際して、イエス様は私たち人間にどのような言葉を残されたのか。それがとても大事です。イエス様が残された言葉というのは、私たちが聖餐式に臨むときの制定語と呼ばれる言葉です。つまり、「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」と言われて私たちがパンとブドウ酒を頂く時の言葉です。私たちが聖餐式でいただくパンやぶどう酒は、ただの食パンやぶどうジュースではありません。私たちは、これらを食べて飲むとき、同時にこのイエス様のこの制定語を思い起こして、私たちが、ずっとイエス様との食事である聖餐にあずかり続けていることに思いをいたすことでありましょう。そして、その聖餐の食事は、これから神の国が来る迄続けられるのです。私たちはそのことを次の世代の人たちに伝えていく必要があるのです。このことは私たちが語りついでいかないと絶対に次につながらないのです。

　さて、このイエス様との最後の晩餐ですが、それはイエス様がエルサレムに入場されてから十字架にかかるまでの間の、何時になされたのかは明らかではありません。ただ、イエス様がこの食事会を催す時を見計らっておられて、ここぞというときに催されたことは間違いないでしょう。それはどういうときかと言うと、弟子の一人であるユダの裏切りが実行される直前という事です。イエス様はなんでもお見通しの方ですから、これからユダが自分を裏切って、自分が逮捕されるという事を知っていましたけれども、それは父なる神の十字架のご計画として、イエス様はそれに逆らうことはなかったのです。そして、裏切りが実行される前に、弟子たち皆で、食事をしたということに、私たちは大いなる神の救いを感じるのではないでしょうか。それはユダの持つ罪をイエス様が大目に見られたという事以上のことではないでしょうか。イエス様がユダのことを大目に見られただけなら、イエス様はみんなとの食事の席で「見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおり去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」などとは敢えて言われなかったことでしょう。イエス様が、ユダとは名指ししないまでも、敢えてこのような弟子の裏切りに言及されたのは、まさに私たち罪びとを食事に招いてくださるイエス様の愛に他ならないでしょう。そしてイエス様は罪びとが罪人であり続けることを悲しまれています。イエス様はこのようにして罪びとに悔い改めを促されています。そしてその促しは、イエス様と私たちが共に座る食卓の席においてなされるのです。

　このようなイエス様との愛の食卓においても、弟子たちの心は千路に乱れています。誰が裏切者なのかを詮索したり、或いは、誰が一番えらいのかなどを論じ合ったりするのです。まさに私たち自身の有様を見ているようです。食事の席というのは概して気がゆるみますので、そこで各々の地の部分があからさまになるのかもしれません。

イエス様が弟子たちに対して「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」と感謝の念を述べているのはどういうことでしょうか。それは、より具体的に言えば、裏切る心を抱いても、また心が千路に乱れていたとしても、あなた方は、私と食事の席を共にし続けてくれたという感謝の念でありましょう。裏切るものと共に食事をすることへの感謝、それはイエス様が食事の席においてひたすら給仕する者となっていたから持てた感謝の念だったと思います。給仕されるイエス様は遂に、「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。」「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血である。」と言われてその体と血を私たちに与えて下さるのです。

　この地上にあっては私たちはいつでもイエス様から給仕されるものであり続けるでしょう。私たちは日々イエス様からの恵みを頂いてこの世を歩んでいます。そして最後に神の国がきたときには、そこで、イエス様と共に食事の席について飲み食いする者とされるのです。

　ここまで、解き明かしてきて、なんだか、このイエス様との食卓は恵みに満ちて、いいことずくめで、喜びに満ちて、なんの心配もないというようなイメージが満ち溢れていますが、実は、そのイエス様の食卓にあずかる私たちが決して忘れてはならない大切なことがあります。それは、どういうことなのかをユダの裏切りに即して見ていきたいと思います。ユダは食事の席でイエス様から「人の子を裏切るその者は不幸だ。」とほのめかされても、そしらぬ顔をして一向に取り合いませんでした。何故かと言いますと、ユダはもうすでに祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけていたからです。ユダたちの計画はもうすでに動いていたのです。しかしそんなユダも、自殺する直前には「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言います。しかし、それは、同罪の祭司長たちや長老たちに対して言ったのであって、イエス様に言ったのではなかったのです。ユダは「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言い返されてあえなく自殺します。

ユダは最後まで自分たちの計画に従い、懺悔する相手を間違いました。それまで、イエス様と行動を共にし、共に食事をしていたユダには悔い改めのチャンスはその気になれば何度でもあったことでしょう。しかしユダには肝心のその気がなかったのです。

　罪深い私たちのこの世での歩みは悔い改めの連続で在ります。そしてその都度イエス様は聖餐の食卓に私たちを招いて、私たちの罪を赦して下さるのです。しかし招かれる私たちにその気がないならば、主イエスの聖餐にあずかることはかえって危険なこととなってしまうでしょう。私の教えの親は、「懺悔の時間に遅れた時は、絶対に聖餐を受けてはならない」と私に厳しく勧告をされました。彼は罪の赦しがいたずらに進行してしまうことの危険性を身をもって知っていたのだと思います。そのような進行においては、罪は自分の体に固着してしまって、状況はますます悪くなってしまうことでしょう。

　過ぎ越しの食事の期間は、私たちが主イエスの過ぎ越しの恵みを味わい、思い起こすと同時に、「人の子を裏切るその者は不幸だ。」とイエス様から言われない為の、悔い改めの準備の期間でもあるでしょう。私たちは頑なに自分たちの計画により頼むことから解放されて、このイエス様のお計らいのほうに心と体を委ねて参りたいと願います。そしてそのイエス様に感謝と賛美をして参りましょう。

この一週間、まことの過ぎ越しである主イエスの復活を待ち望みつつ、共にこの地上での歩みを進めて参りましょう。

祈ります

この復活日前の主日、私たちはあなたの御子とともに食事にあずかる恵みと救いを知らされました。どうか、私たちがこの一週間、心と体をもってあなたに仕え、頑なさを打ち砕かれて、遂に永遠の過ぎ越しの食事にあずかることが出来るようにして下さい。

世界中で行われている罪を思います。どうか私たちがまことの主である、あなたを知り、その罪を悔い改めて、救いの道を歩み始めることが出来るようにしてください。ことに今ミャンマーで国の統治が暴力によって進められていることに目を留め、その罪を取り除いてください。虐げられている人々にあなたの慰めと癒しと救いをお与えください。

新型コロナウィルスによって、教会の愛餐会も開けないでいる状況が続いています。そんな中でも、あなたは日々、御言葉というマナによって私たちを養って下さることに感謝します。どうか私たちがその幸いを覚えて、感謝と賛美をしていくことが出来ますように。